

高橋孝助著

## 『飢饉と救済の社会史』

川井 悟

高橋氏とは1997年12月に中国現代史研究会のワークショップで氏の報告にコメントしたのが最初の出会いである。そこでの報告は本書のテーマでもある1876-78年の旱災を取り上げたものであり、氏の研究方法は、文献資料からたんねんに歴史的現実接近し、その作業の中で自身の考え方を固めていくやり方、と拝見した。それ以前に、1920年の華北五省旱災とそれへの救済活動を行なった華洋義賑会を研究したことがあり（拙著『華洋義賑会と中国農村』同朋舎、1983年、参照）、1997年時には、解放後の中国農村（特に、上海近郊農村）の社会的変化を追跡していた私は、歴史研究者らしい抑制された陳述をされる高橋氏に対して、①中国農村社会では、貧困と飢饉とがたえず連続した状態であること、②貧困者を救済するシステムがそれぞれの時代ごと、〔省 - 行政県 - 郷鎮市場圏 - 村・宗族〕という地域レベルごとに、特有のあり方で備わっているが、大飢饉というものはその小さな地域レベルでは対応しきれず、場合によっては、省を越え、中国の全国政権の領域でやっと「救済・一段落」がつくこと、③1876-78年時にはまだ清朝と地方名士のボランティアで対応できたものが、1920年には中華民国北京政権の非力ゆえ、華洋義賑会という外国人キリスト教団体を中核とする団体連合が活動する余地ができたし、またそれしかなかったこと、④1949年以後は再び外国からの援助なしに中国国内政権が対応するシステム（これは決して、完全な救済がなされた、という意味ではない）が作られ、国内で処理されたいこと、そして⑤1980年代以降は、貧困や飢饉を含む農村の状況の情報とそれに対する政府を中心とする国内の対応の情報も国外に漏れ出すようになり、外国からの援助が投資や給付やボランティアの形で入ってくるようになったこと、等を述べたような記憶がある。（コメント当時はその場での思い付きを整理したものであったから、ここに述べたのと多少表現が違っているかもしれない。詳しくは、『現代中国研究』第6号「特集：現代中国における貧困と開発」2000年3月、参照のこと）。高橋氏はまったく見ず知らずの若輩者から偉そうで大風呂敷のコメントをつけられ面食らわれたであろうが、応答は丁寧で、学者らしい態度を崩されなかった。それから8年。高橋氏はその研究を本書にまとめられた。当然のことながら報告時より

説明は詳細となり、わかりやすくなっている。もともと人々の生活線上に近づこうとされていたのが、いまや生活面に近い位置にまで降りられて叙述されている印象である。史料では文章でしかない状況が、高橋氏の説明によって、読む者の近くの現象と意識されるまでになっている。さらに冒頭で、文化大革命で死に追いやられた鄧拓の『中国救荒史』が取り上げられ、「あとがき」での説明とあいまって、1876-78年の旱災を扱う本研究は、背後に現代中国に対する問題意識を秘めていることが知られる。1997年時にも1958-60年の飢饉への視点を表明しておられたが、本書では鄧拓の扱いによってそれがいっそう鮮明になっている。

他方、評者である私にもいくらか変化があった。2000年4月からの新しい勤務先は、いわゆるミッション系大学で、この勤務を通じてイギリス聖公会を中心とする日本のキリスト教徒について少し知ることができた。大学でなされているボランティア活動やカリキュラムの中の「サービスマーケティング」という科目を通じて、善意を持って、貧しい人、ハンディキャップある人を助けるという活動をする側の心理や活動の効果、その活動の社会的意義について考える機会があった。また中国河北省農村を訪問し、華洋義賑会がかつて農村合作社を作った村の人を通じて合作社のその後を思った。農村の草の根活動をもとにしたグラミン銀行創設者がノーベル平和賞をもらったことは、同じようなことを企図した華洋義賑会の活動をもう一度思い起こさせた。そして、たえず伝えられる世界の飢餓、国際機関の救済と援助、貧困地域における無法状態等のニュースは、問題を中国史だけに限定して考えることを許さないような気にさせた。何よりも、20年前に華洋義賑会の活動を考察していた頃は1970年代の日本から「別世界」と見なしていた中国農村の人々一人一人を、今は、別の状況下に生きている「兄弟」とはいわぬまでも「隣人」として感じるができる。

本書評は、こうした変化を意識しながら、高橋氏の書物から私が得たもの、感じたものを、主観性が勝ったような文章で述べたものである。この私的な意見と感想が、1876-78年の中国飢饉研究だけでなく、中国災害史研究、広く中国農村社会研究、さらには中国近現代史研究に建設的意義をもつことを願うものである。

ここで、目次の大略を示し、本書のいくつかの部分について、気づいた意見を述べる。

序章 鄧拓『中国救荒史』をめぐって

第1章 大旱魃の襲来

第2章 江南と難民

第3章 慈善活動と飢饉救済

第4章 「荒政」の論理と方法——山西の場合

第5章 山東における留養局・撫教局と「贖田」論議

第6章 河南における「代贖局」

序章は、1937年に『中国救荒史』を発表した鄧拓（筆名、鄧雲特）が人民共和国においてどのように扱われてきたのかという問題と関連させて、人民共和国における「飢饉」や「救災」がどのように考えられてきたかについて論じる。解放前の中国社会では飢饉がたえず起こり、それを若き鄧拓は社会の構造の問題としてとらえたこと、そして社会主義になってからは、一時、飢饉問題は解決したと思われていたこと、大躍進政策の失敗をめぐって中国共産党内に認識の違いがあり、このことから、北京市党委書記はじめ要職についていた鄧拓は文化大革命の中で真っ先に批判され自殺に追いやられたこと、のちに鄧拓の名誉回復とともに、中国では飢饉史・救災史が取り上げられるようになり、目前の利益を求める社会において効率のみを迫及する政策に対して飢饉史・救災史の歴史的事実を踏まえた発言が行なわれようになっていること、が示される。

鄧拓については、かつて、京都大学人文科学研究所にいた村田茂氏から文化大革命犠牲者の一人として教示されたことがある。（竹内実・村田茂編著、1983『ひとびとの墓碑銘』霞山会）。しかし、1983年時には、私にとって鄧拓は、竹のカーテンの向こうで、文化大革命の犠牲になった伝説の存在でしかなかった。この書評を書く機会に上記書物に編集された追悼文を読んでみたが、そこに描かれている鄧拓の誠実な人物像には感動せざるを得ない。

鄧拓の飢饉に対する考え方は、現在から見てもまったく首肯できるものである。それは、解放前の中国社会経済の主要問題を解明するうえで、マルクス主義的観点が有する分析力の確かさを示している。私は、人間の労働の成果たる社会的生産物が市場経済や利潤というインセンティブを用いないで分配される社会についても広義のマルクス経済学による分析が可能だと考えているが、もしも鄧拓が1949年以後の中国社会主義における現実の飢饉と救災を分析すれば問題の本質を鋭く抉り出す成果が出たに違いないと思う。それは毛沢東を崇拜し利用するだけの凡庸な輩には耐えられないような鋭い分析だったに違いないと思われる。

鄧拓を用いてその評価の変遷を取り上げることで、高橋氏は、飢饉・救災問題の現代的意義と社会主義中国の飢饉問題に対するとらえ方について述べているのであるが、しかし、直接に、社会主義下での飢饉や救災を取り上げ分析しているわけではない。大躍進政策下の「飢饉」について他の書物の文章を引用しているところをみると、高橋氏は中国社会主義下でも飢饉は存在していること、この問題を考えるうえで中国歴史上の飢饉や救災を考えることが意義あると考えていること、がわかる。また、中国でも飢饉史・救災史を研究する気運が出てきて研究者たちがそのような考え方をとっていることを肯定的に紹介している。しかし、欲を言えば、直接に議論してほしかった。中国社会主義が以前の中国社会とどこが変わったのかきちんと言わないで、「コラム」で現代中国社会が100余年前の中国社会と似ていることをほのめかすこと等によって、中国には以前と同じ社会的特質があり、

それが現代中国においても災害や飢饉を再現させているというあいまいな言い方で終わっているのは「20世紀中国を考える」にしては婉曲すぎるやり方である。このように書きつつ、もしこれが「あとがき」で述べられている吉澤南氏のコメント「事実の扱い方によっては、誤解を受けるようなものを書くことになるぞ」がいう「誤解」にまではなっていないにしても、それを超えようと努力された高橋氏の真意を十分理解していないのではと恐れている。

第1章から第6章までは本書の中核をなす。

第一に、広大な中国では実際に何が起こったのかという基本的な事実さえも確定するのが難しい。飢饉の混乱時には特にそうである。調査のための旅行は困難になり、現地からの情報は誇大になりやすい。告白する。高橋氏の叙述をみると、1983年の「華洋義賑会」研究時の私の、1920年の早災の災情についての事実確定がいかにもいいかげんだったか身にしみる。私の場合は、飢饉をきっかけに華洋義賑会が救災活動をしたこと、そしてのちには防災のため「農村信用合作社」普及活動をしたことが重要であって、合作社の実態についてはずいぶん注意したつもりだったが、飢饉の実態紹介は華洋義賑会の報告書に頼ってしまった。高橋氏は、『申報』、ティモシー・リチャードの旅行記、『地方志』、官僚や名士の『文集』を縦横に利用されている。全体の叙述を分かりやすくするため苦勞して整理されたことと推察されるが、叙述ではなお時間と地域が前後するところがある。しかし、その整理しきれぬ繁雑さが飢饉の重大性をいっそう際立たせている。災民と流氓との区分など、事実の絶対に正確な確定は不可能だろうが、本書はそれを可能な限りなそうと努力されている。

第二に、本書では、飢饉時の被災民の情況、難民の情況、難民受け入れ情況、救災情況、名士・キリスト教宣教師らの慈善活動、関係者の動き、飢饉後の難民の移送や人や耕地の回贖、生産再開の支援、等について詳細に説明がなされている。もちろん、紙幅さえ許せば、高橋氏はもっと詳細な説明をいただろう。したがって、個別の情況についてはもっと詳細な叙述が可能かもしれない。しかし、この分量の書物ではこれ以上は望めまい。そして、被災民の情況、それを観察するものの気持ち、難民とそれを受け入れるものの気持ち、「善士」の行動、粥廠の情況、関係者たちの行動、等、私がもっとも多くを教えられたのがこの部分、すなわち飢饉の実態と救災の実態であった。私の関心から言えば、「善士」や官僚やその他さまざまの多くの人々の行動の根底にある行動原理は何か（私は、中国という古くからの「取引社会」におけるある種の「計算」と「信念」ではないかと思っている）、まで論及してほしかったが、もとよりこれはないものねだりである。

第三に、飢饉と救災の実態を述べる中で、高橋氏はこの1876－78年早災にみられる歴史的特質を明らかにしている。そしてその特質は、終章の中でもっともまとまった形で述べられている。すなわち、1876-78年の早災によって明らかになったこの時点での中国社

会の特質とは、①旱災の舞台となった黄土高原農村を例にして言えば、道光年間から始まったケシ栽培が山西における穀物生産とその備蓄システムの基礎を崩壊させていたこと、②官側は、救災・復興にあたって以前と変らぬ「一省内で穀物を自給できる農業生産の確立」「農村の・・・貧困のままの再生」をはかったこと、③この救災にあたっては、官側の「荒政」を柱とし、上海等を拠点にして蓄財した「新式商人」たちが「善士」として慈善活動に活躍したこと。このことは、一面では当時の中国における富の偏在の新しい傾向を示すとともに、他面では彼らによる「善意」と「献身」と「きめ細かな救済の工夫」がなければ被害はもっと大きかったであろうこと、④この時点ではもちろん、中国近代においては、農村からの離村者・難民を労働力として受け入れる工業化が達成されることはなく、都市には雑業層を中心とする貧困層を形成することになったが、1876-78年の旱災時にはそれが端緒的にみられたこと、⑤1876-78年の旱災の惨状は、鉄道建設の議論を補強する一方、土地税の税込減および財政支出増という国家の政策にも影響を及ぼしたこと、等である。（以上は、評者によるまとめである）。これは、1997年のワークショップでの私のコメントに対する高橋氏の、1876-78年の旱災の歴史的な位置付けを中心にした回答である。

私事を書く。私の通勤途上で数十分歩く箇所がある。必要な道具一式を両肩にかけたカバンにつめこみ、時速2.5kmで歩きながら、樹木に季節を感じ、家並みにそこに生きた人々の生涯を思いつつ、いろいろなことを考える。たいていはその日の授業や会議や仕事の進め方についてのプランだが、時に、人間社会を貫く原理や社会現象についての考察だったりする。ふとしたことから思いついたアイデアで全体を説明できるのかいろいろな事例について頭の中で忙しくシミュレートしてみる。こうした中で、何度も何度も考えるのが次のシミュレーションである。

豊かな現在の日本に生きてみると、「物」の生産ばかりでなく、その分配やサービス、その製品を売るための宣伝や企画やサービス行為まで「生産的経済活動」だと思ってしまう。流行の経済学がそう教えているし、実際にそうした仕事をしている人がたくさん収入を得、何よりも日本経済が物を作ることでよりできた物を手に入れる行為のおかげで成り立っているからである。しかし、肉体という存在に制約されている人間は、自然界から得る「物」なしには存在し得ない。その「物」を得るのに、「生産」だとか「収奪」だとか「贈与」といったどのような名称をつけようと、それは人間界内部の事柄であって、人間界が外的自然界から「物」を入手しないことには何事も始まらない。それが厳然たる事実であるにもかかわらず、豊かさになれた日本社会では、そうした「物」の価値は入手行為の社会的重要性の評価で測られ、この入手行為はさらに、宣伝をはじめとする需要喚起や情報処理等、分配の精巧なテクニックによって複雑にされている。いまや何が「生産」労働なのか、何が「価値」なのか論理的に統一して説明することは大変込み入っていて、多くの研究者も、ただ現象としての「価格」のみを考察対象としている。この事情は現代の中国

でも同様である。

しかし、しかし、「物」が人間界を支える一つの基礎要件である限り、経済的に採取可能な資源の枯渇や気象条件の変化、人間界の争いと破壊、そして何よりも、「利益」のないことはしないという社会の仕組みによって、「物」自体の不足が生じたとき（人はこれを「貧困」や「飢饉」と呼ぶのである）、人はこの基礎要件を思い出させられるであろう。記録に残っている「貧困」や「飢饉」の実態を見ると、いつも「物」が人間たちに比べて圧倒的に不足しているわけではない。多くの場合、「貧困」や「飢饉」は「物」の不均衡分配が激しくなった状態であり、「援助」や「貸付」という形の「移転」で解決できるし、また「解決」してきた。ある場合、「貧困」や「飢饉」は「物」が絶対的に不足する「マルサス」的状況であることもあったが、貨幣経済を生み出した人類は貨幣を持たぬ人に「諦める」方法を教え込んだ。しかし、将来もそうなのだろうか。

私は、「物」の分配の不均衡が問題を生み出す限りでは、人類はその知恵によって問題を解決できると考えている。そして将来における「物」の絶対的不足が予想される場合、十分な準備時間があれば問題を未然に解決できると思う。人類社会において、自発性によって個人の能力を最大限に発揮させるのに貢献してきた商品経済・市場社会のシステムに加えて、いくらかのボランティア支援と「物」の移転、それらをコントロールする調整役がいれば、問題はスムーズに解決されえよう。実際の歴史はこのようなスムーズさには欠けるものの、なんとか「解決・一段落」をなしてきた。そしてその過程でおびたしい無駄をしたと思う。

長い中国の歴史はその経験を学ぶに良い材料である。それは、中国人社会の特徴を色濃くまとっているとはいえ、その時代・地域・社会という枠組みの中での、「貧困」や「飢饉」の解決に向けての知恵と努力の記録である。高橋氏の研究は、この貴重な記録の一端を整理して、飢饉の予感におびえつつも日常生活では「中国の昔の飢饉の記録など調べて文章を書き、仲間内でのみ褒めあっていて何になるの。紙の無駄」と感想を言う現代の日本人に対して、その時になってはじめてその意義がわかる知恵の成果を、わかりやすい形で残してくれたのである。（青木書店、x + 322p + 8p, 2006年、3400円+税）。

（かわい さとる・プール学院大学）